

第2章 哲学の終焉

55

懐疑論者が本当に信じていること

とうとうカール・ポパーが質問に答えた：反証可能性は反証可能か？

自分のパラダイムでがんじがらめのトーマス・クーン

ポール・ファイヤアーベントは哲学のアナーキスト

コリン・マツギンは哲学に死を宣告する

ザヒールの意味

第3章 物理学の終焉

95

シエルドン・グラシヨウの疑い

エドワード・ウィッテン、超ひも理論と異星人を語る

ステイーブン・ワインバーグの意味のない統一理論

ハンス・ベーターは最後の審判の日を計算する

ジョン・ウィーラーと「ビットからビット」

解るようでは解らないデイビッド・ボーム

リチャード・ファインマンと哲学者たちの逆襲

監修者序文——筒井康隆

序章 答えを求めて

13

ロジャー・ペンローズの「窮極の答え」に対する煮え切らない態度

科学と文芸批評のちがひ

科学の「影響の不安」

皮肉の科学とは？

第1章 進歩の終焉

25

もう科学は信じられないという会議

科学は成功しすぎたために終わるのか？ 100年前に物理学者たちが本当に考えたこと

出典の怪しい特許局長のエピソード

ベントレー・グラスがヴァンネヴァー・ブッシュの終わりなきフロンティアへ疑義を差し挟む

レオ・カダノフは物理学の先行きを不安に思う

ニコラス・レッシヤーの希望的観測

フランシス・ベーコンのプリユス・ウルトラの意味

消極的な能力としての「皮肉の科学」

社会生物学の最終理論を恐れるエドワード・ウィルソン
ミステリーとパズルに挑むノーム・チヨムスキー
クリフォード・ギアツの永遠の困惑

第7章 神経科学の終焉

235

生物学のメフェイストフェレス、フランシス・クリックが意識と対決する

謎のまわりで気取つてみせるジェラルド・エーデルマン

最後の二元論者、ジョン・エツクルス

ロジャー・ペンローズと準量子的な脳

ミステリアンの逆襲

ダニエル・デネットはミステリアンか？

一心不乱に恐れをなすマービン・ミンスキー

唯物論の勝利

第8章 カオプレクシテイの終焉

279

カオプレクシテイとはなんぞや？

クリストファー・ラングトンと人工生命の詩

第4章 宇宙論の終焉

141

ステイーン・ホーキングの無限のイマジネーション

ビッグバンの推進役、デイビッド・シユラム

宇宙の司祭たちの疑念

アンドレイ・リンデのカオス的でフラクタルで永遠に自己再生するインフレ宇宙

永遠の反逆児、フレッド・ホイル

宇宙論は植物学になるのか？

第5章 進化論生物学の終焉

171

ダーウインの忠実な獵犬、リチャード・ドーキンス

ステイーン・ジエイ・グールドの人生観：失敗はつきものさ

リン・マーグリスはガイアを糾弾する

スチユアート・カウフマンの整然とした無秩序

生命の起源という永遠の謎に思い悩むスタンリー・ミラー

第6章 社会科学の終焉

211

フランク・テイプラーの「胡麻かさん」な見方

オメガポイントは何をしたいと欲するか？

終章 神の恐れ

379

ある神秘的体験

オメガポイントの意味

チャールズ・ハートシヨンと異端のソツツイーニ派

科学者が真実に対して態度を決めかねる理由

神は爪を噛むか？

訳注・原注

主要参考文献

謝辞

訳者あとがき

現在入手可能な邦訳書および関連書

索引

(各章ごとの項目は本文中の小見出しとは異っています…原書ママ)

ペール・バツクの自己組織的臨界状態

サイバネティックスとその他もろもろのカタストロフィー

フィリップ・アンダーソンの「もつと違う」つてどういう意味か

「ほかの何か」を拒絶するマレイ・ゲルマン

イリヤ・プリゴジンと確実性の終焉

テーブルに負けたミツチエル・ファイゲンバウム

第9章 リミトロジの終焉

331

サンタフェで「科学的知識の限界」に思いを巡らす

グレゴリー・チエイティンとハドソン川で会う

フランシス・フクヤマ科学を切る

スタートレック効果

第10章 科学的神学、または機械科学の終焉

359

J・D・バーナルの忘れられた予言

ハンス・モラヴェツクの小うるさいマインド・チルドレン

フリーマン・ダイソンの最大の多様性の原理